

● はじめに

2002年小泉首相のもと、医療制度改革が断行され、診療報酬の引き下げ、薬価の改訂、患者の医療費負担増が実施されました。これにより国民の医療問題に対する関心は高まってきました。さらに高齢化時代に突入で2020年には65歳以上人口は300万人を突破することからも、健康保険財政を圧迫はされられません。医療費の約5分の1は薬剤費であり、厚生労働省はこのたび薬価の低い「ジェネリック医薬品」の使用を促進してきました。そこで今回最近テレビのコマーシャルでもよく聞く「ジェネリック医薬品」についてのお話しをしたいと思います。

● 「ジェネリック医薬品」とは？

医療用医薬品には、全く新しい薬、新薬とジェネリックと言った医薬品業界の独特の呼び名があります。これはこれらの薬が市場に出てきた時期により分類される呼び方です。新薬の多くは開発能力の高いいわゆる大手製薬企業によって製造されます。これには独自の商品名が付き、ブランド品または先発品として市場に流通します。ブランド薬が長年使用されて、その特許期間が終了すると、他の製薬会社が自由に製造できるようになるのです。これがジェネリック医薬品です。なぜこのように呼ばれるかは、その薬がもっている化学式を世界的にWHO（世界保健機構）が統括して、“一般的”な名称で呼ぶことからカタカナでジェネリック、つまり一般名薬品としているからです。

● どんな種類の薬が「ジェネリック医薬品」となるのか？

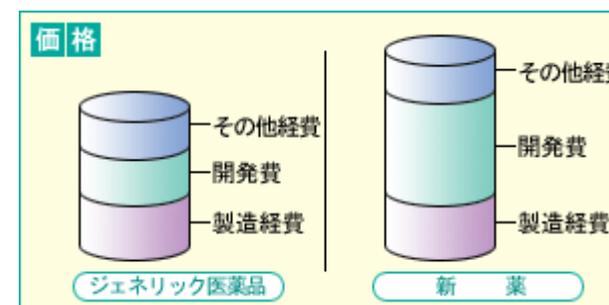
ジェネリック医薬品の採用については、まず病院側からとしては、品切れを起こさないように安定した供給ができるか、また少量でも対応してもらえるか、その薬についての十分な情報提供ができるか、副作用の被害に対する救済給付が可能かということになります。特に、慢性疾患、例えば糖尿病、高血圧などの成人疾患、精神科神経科領域の疾患などにはジェネリック医薬品が使える適応症が多く、低価格で患者様の負担も軽くなると言えます。

● 「ジェネリック医薬品」の普及は？

ジェネリック医薬品は低価格の提供が可能のため、患者の負担を軽減するだけでなく多方面での活躍も期待されている。アメリカでは49%、イギリス49%、ドイツ40%の普及率であるのに対して、日本では13%であります。また、日本における全国42の大学附属病院の医薬品の使用状況を調査した結果、ジェネリック薬品の使用率はわずか3.1%でありました（2002年8月現在）。こういう結果から見ると、日本よりも欧米の方が患者様のことや、各々の国の医療経済につい

てよく考えているものと思われます。

● 「ジェネリック医薬品」はなぜ安い？メリットは？



一般的に新薬の開発には膨大な時間、人件費を含めた費用がかかります。しかしジェネリック医薬品は新薬の長年にわたる臨床使用経験（有効性・安全性等）に基づいて開発・製造されるので、開発コストが少なく済み、新薬に比べて低価格で供給することができます（左図参

照）。新薬の薬価の2割から7割くらいです。

またジェネリック医薬品を使うことによるメリットとしては、まずこれは新薬の特許が切れた後に市販されるため、患者様へ安価で提供できます。さらにそれだけでなく、より体に優しく、飲みやすく改良したり、フロンガスを使わない吸入式喘息治療薬を生み出すなど工夫されたところが挙げられます。

● 「ジェネリック医薬品」使用カードについて

医療費の患者負担が増え、安価なジェネリック（GE）薬に関心が高まる中、患者側から処方医に対しGE薬の使用を求めやすくするため「ジェネリック医薬品お願いカード」を、日本ジェネリック研究会（会長・武藤正樹国立病院機構長野病院副院長）が作成した。武藤会長は、「患者も医師もGE薬を使いたい、とはまだ言いづらいつころがある」として、カードによる意思表示を考案した。カードは、縦5cm余り横8cm余りのクレジットカード大で、表に研究会名と「私はジェネリック医薬品の処方を希望します」とある。裏には「医療従事者の皆様へ」として、GE薬がある場合は処方をお願いし、一般名処方でもよいことを示した。



● 最後に

ジェネリック医薬品は安定供給とその安全性さえ確実に確保できれば、患者様への安価な薬物を先発品と同等の効果でもって提供することが可能となります。さらにこれからの医療経済にも大きく影響を及ぼすものと考えられ、今後これらの貢献には期待していききたいものと考えます。

